

大会特別規定

試合は『2008年公認野球規則』ならびに、下記の大会特別規定により行う。

1. 用具に関する規定

同一チームの各プレーヤーは、同色、同形、同意匠のユニフォームを着用し（スパイクを含む）そのユニフォームにはシート順に背番号を1番から9番までつけ、以下補欠に順次番号をつける。試合中、登録メンバー以外はベンチに入ることはいできない。

部長（責任教師）は、監督・助監督・コーチを兼任する場合は、平服でベンチに入ること。監督、助監督、コーチは、ユニフォーム着用でなければベンチに入ることはいできない。（コーチは1名とする）

登録されたマネージャーは、制服又はジャージでベンチに入ることができる。（マネージャーは生徒1名とする）

ベンチ内での携帯電話の使用を禁止する。また、メガホンは1個に限り使用を認める。

ベンチサイドは、抽選番号の若い方を一塁側とする。

ノッカーはユニフォーム着用でなければノックすることはできない。なお、ノッカーは登録メンバーに記載されている者に限る。

打者及び走者は、ヘルメットを着用しなければならない。

捕手は、守備用具（マスク・ヘルメット・プロテクター・レガース・スロートガード）を着用しなければならない。

金属製バット・カーボン製バットは、「全日本軟式野球連盟」が承認したものに限る。（J.S.B.B.マーク入）また、雷等の理由により金属製バット・カーボン製バットの使用が出来ない場合があるので、規定に合った木製バットを2本以上持参すること。

2. 大会運営に関する規定

1・2回戦は7イニング制及び時間制併用（試合開始後1時間20分で次回最終回）とする。また、同点の場合は1死満塁で継続打者によるサドンデスで勝敗を決定する。

審判員が試合の途中で打ち切りを命じたときに正式試合となる回数の規則4.10(c)については、5回とあるのを1・2回戦では5回、3回戦以降は7回と読み替えて適用する。

正式試合となる得点差コールドゲームは、1・2回戦は5回以降7点、3回戦以降は5回以降10点、7回以降7点とする。（決勝戦は除く）

延長戦において15回を終了しても勝敗が決しない場合は、翌日特別継続試合とする。ただし、決勝戦は18回までとし、勝敗が決しない場合は、翌日再試合とする。また、ダブルヘッダーの日の延長戦の中断については、その状況に応じ大会役員が協議のうえ、両チームに伝達する。

暗黒、降雨などで試合が途中で中止になった場合は、7回（1・2回戦は5回）以前に中止にな

っ

た場合（ノーゲーム）でも、7回（1・2回戦は5回）を過ぎ正式試合になって同点で試合が中止の場合でも、原則として再試合にしないで、特別継続試合を行う。ただし、決勝戦は再試合とする。

日没（暗黒）まで短時間しかない場合でも、試合を開始することがある。審判員は、あらかじめ両チームの監督にどの回で打ち切りになっても特別継続試合を行うことを条件に、試合をできるところまで行う旨を申し渡してから、試合を開始する。

3. 試合運営に関する規定

チームは、試合開始予定時刻1時間前までに必着し、到着を各球場本部に届け出ること。ただし、

大会運営上支障のある場合は、本部の指示により到着すべき時間を変更することもある。

先攻・後攻の決定は、第1試合は開場後準備が出来しだい、第2試合以降は前の試合の5回終了時に監督・主将・審判・大会役員の立会いで行う。なおその際、テーピング使用者は同席し確認を得ること。

先攻・後攻決定時に所定のオーダー用紙（氏名にふりがなをつけて）5通を提出すること。

シートロックは、前の試合終了後、後攻チームより直ちに開始する。時間は5分間とする。

（ただし、天候、球場の状況によりできない場合、あるいは時間を短縮する場合もある）

責任教師、監督、助監督、コーチ、マネージャーは、試合中グラウンド内に入ることにはできない。

（選手に指示を与える場合は、伝令を出すこと。ただし、負傷者の出た場合はこの限りでない）

オーダー用紙交換後は、選手の一時的な交代は認めない。ただし、試合中、選手に不慮の事故などが起き、一時走者を代えないと試合が続行できないと審判員が認めた場合は、相手チームに事情を説明し、代走者を出してもよい。ただし、代走者は、出場している選手に限られ、交代は前位者とする。（投手・捕手は除いてもよい）

攻守交替時に守備に移るチームがスピーディにポジションにつくことは勿論のこと、攻撃に移るチームも第1打者とベースコーチは、ミーティングを離れ、所定の位置に速やかにつくこと。

選手交代の時は必ず球審に通告すること。また、一度通告してからの取消しは認められない。

打者はみだりにバッターボックスを出ることは許されない。たとえタイムを要求しても、審判員がタイムを宣告しない時はインプレーとする。

次打者は必ずウエイティングサークル内に低い姿勢で待機し、前の打者が打撃を完了しだいすみやかに打席に入ること。

走者やベースコーチが捕手のサインを見て打者にコースや球種を伝える行為を禁止する。もしこのような疑いがあるとき、審判員はタイムをかけ当該選手と攻撃側ベンチに注意を与えやめさせる。

バントとは、バットをスイングしないで、意識的にバットに投球をミートさせ、内野をゆるくこるがようにした打球である。自分の好む投球を待つために、打者が意識的にファウルにするような、いわゆる“カット打法”は、そのときの打者の動作（バットをスイングしたか否か）により、審判員がバントと判断する場合もある。

規則3.03【原注】前段のうち「同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできない」は適用しない。

[規則適用上の解釈]

投手は同一イニングで二度目の投手に戻れば、それ以降は他の守備位置につく事はできない。高校野球特別規則で認めるのは、投手 野手 さらに野手への交代である。

投手 野手 投手 = 規則3.03【原注】適用 投手 野手 野手 投手 = 高校野球特別規則

投手 野手 野手 = 高校野球特別規則

規則7.06(a)【付記】（捕手のブロック）の適用について、高校野球では捕手は、『ボールを保持しているときしか塁線上に位置することはできない』こととする。

[規則適用上の解釈]

(1) 走塁妨害を適用するのは、あくまで捕手のその行為がなければ当然本塁に到達できた、と判断できる場合である。

(2) 捕手のその行為が走塁妨害にもかかわらず、瞬間的に「アウト」のコールをした場合でも、改めて「オブストラクション」の宣告をしない。

(3)走塁妨害適用外であってもそのような行為があった場合は、試合を停止したうえ、捕手に対して厳重に注意すること。

規則9.02(c)【原注】では、打者がハーフスイングをし、球審がストライクの宣告をしなかったときに、守備側から塁審のアドバイスを求めるよう要請することができる となっている。

ハーフスイングをリクエストする捕手は、打者を指差し、口頭で「スイング」「振った」と球審に要請することとする。しかし捕手が一塁や三塁の塁審に対して直接指差してリクエストすることはできない。ただし監督は、打者が振ったか否かについて、ベンチ内から捕手に指示することはできるが、伝令を使うことは禁止する。

バントは定義上スイングではない、となっているが、高校野球では、バントのときでもハーフスイングのときと同じく、球審は塁審にアドバイスを求めることができることとする。

審判員に対して規則適用上の疑義を申し出る場合は、主将、伝令または当該選手に限る。

4. その他の規定

オーダー用紙の取り扱いについて

オーダー用紙の誤記に関する事例の取り扱いを次の通りとする。

(注)登録選手とは、当該大会に選手登録された選手をいう。

オーダー用紙とは、当日ベンチ入りする選手すべてを記載したもの。

ケース1：試合前のオーダー用紙交換時点で大会本部の登録原簿照合により誤記に気付いた場合。

(処置) 出場選手、控え選手を問わず、氏名、背番号の誤記を発見した場合、注意を与えて書き改めさせ、罰則は適用しない。登録原簿以外の選手が記載されていても同様の取り扱いとする。

ケース2：オーダー用紙交換終了後、試合開始までに誤記が判明した場合。

(処置) 誤記に関する訂正は認められない。登録原簿通り記載された選手しか出場資格はないが、チーム自体の没収試合とはしない。

ケース3：試合中に誤記が判明した場合。

(処置1) 登録選手間の背番号の付け間違いは、判明した時点で正しく改めさせ、罰則は適用しない。

(処置2) 登録外選手が判明したときは、実際に試合に出場する前であれば、その選手の出場を差し止め、チーム自体の没収試合とはしない。(代打などの通告を本部で原簿照合して判明したときなど)

(処置3) 登録外選手が試合に出場、これがプレイ後判明したときは、大会規定により試合中であれば没収試合とし、試合後であればそのチームの勝利を取り消し、相手チームに勝利を与える。

負傷選手のベンチ入りの取り扱いについて

大会前または大会中の負傷で試合出場が不可能となった選手(例えば手足の骨折など)のベンチ入りについて、「医師の診断書で試合出場が不可能となった選手でも、試合には出場しない条件でベンチ入りは認めることとするが、試合前後のあいさつをはじめ、伝令、ベースコーチなど試合にどの程度参画させるかは、当該選手の負傷の程度を勘案して大会本部が決定する」とする。